

天使の詩

—高野洋子追悼集—

李
賀

天使の詩

編集責任者

大沢 初夫

印刷所

高堂印刷所

発行年月日

昭和四十七年六月三十日

連絡先

埼玉県北埼玉郡北川辺町大字麦倉一四五

大沢 初夫

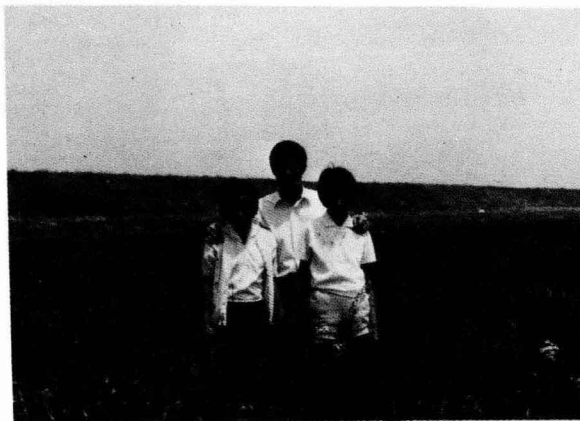
電話

〇二八〇(六)二五三五



草加中学 入学式直後 ↑

利根川にて ↓



日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

・新聞記事	5
・思い出詩集	11
天国	12
いちよしの若葉	16
こてきパレード	18
秋	20
かき	21
おさつ	24
休んだ日	26
鳥の国	28
書き初め	30
まほう使いになれたら	34
空	36
星	38
たばこのけむり	42

利根川……………	46
日記を読む先生……………	50
歩行者天国……………	68
けごんの滝……………	70
フラワー……………	72
「私のユメ」……………	73
「卒業」……………	74
「さようなら先生」……………	76
雪……………	78
・中学生になって……………	81
病院からの手紙……………	84
・御両親のことば……………	121
・あとがき……………	122

天 国

階段を一段一段のぼっていく
天国の門

赤く青く緑の美しい花で
かざって愛の門をあける

チョウチョ・小鳥・リスのわ
いあい動物たち

雲はみんなわたあめ
雲の上には

白い輪郭の上につけた天使
たちが飛んでいる

病室)

(埼玉県加西市・高野洋子)

日、月曜をのぞく毎日、この

欄に載っている「小学生の詩」

の係りに、このほろろの死を

手紙するのようなどんな作

品が、進歩の山本和氏から送

られてた。「病死したとも

の作品は、あるいは動機がない

かもしれないが——との懸念

書きを添えて——。

ある小さな詩人の死

高野洋子ちゃん



満五か月、幼い生命を断つまで
固執けになった。最終的な病名
は「脳脊髄液減少症」。

「たいつしのき」本を読ん
だり(マンガばかりじゃない

い)お花を作ったり、日記を書
いたりしています。そんな手紙

をもらっていた大沢初夫先生
も、あんなにやさしく、何も残っ

てない。いのちを確かめるため
にも……とほじめていたそう

だ。

それが、短い小童のいのちを
記録することになった。

むしらは

白く高きびえたつ美しいお
たから遺稿箱になりた。美しい

白衣を纏って病人のためにいつ

きうけんとて、とてもいい

仕事だろ(ユメ)あにな

つてみる。なぜか暗示的な作

品が多いが、本人は表面的には

最期まで余命を懸念しなかつ

た。食欲もあり、なくな

る前夜もテンテラうんを食べ

た。

(ある小さな詩人の死)

天国

階段を一段一段のぼっていく

天国の門

赤、青、緑、黄の美しい花で

かざってある門をあける

チヨウチヨ、小鳥、リスのかわ

いい動物たち

雲はみんなわたあめ

雲の上には

白い輪を頭の上につけた天使た

ちが飛んでいる

(埼玉県草加市・高野洋子Ⅱ病没)

日、月曜をのぞく毎日、この欄に載っている「小学生の詩」の係りに、このほど自らの死を予告するかのような、こんな作品が、選者の山本和夫氏から送られてきた。「病死したこどもの作品は、あるいは前例がないかもしれないが――」との添え書きをつけて――。



「ちょっと声がおかしいな」

とひとりっ子の洋子ちゃんの異状に、両親の三一郎さん^(四六)(会社員)、歌子さん^(四四)が気付いたのは、去る七月一日。それまで、医者にかかるようなことのなかった元気な洋子ちゃんを連れ、近所の医者に見せるとヘントウセン炎、注射と抗生物質の投薬を受けた。が、一向にハレがひかない。

病院を転々したあと東京・渋谷の日赤中央病院耳鼻科をたずねたのが半月後。即日入院をすすめられ、去る九月十八日、十三歳五か月で幼い生命を断つまで居続けになった。最終的な病名は「ヘントウセンシヨウウ」。

「たいくつしのぎに本を読んだり（マンガばかりじゃないよ）お花を作ったり、日記を書いたりしています」そんな手紙をもらっていた大沢初夫先生（草加市立高砂小）もショックだった。大沢先生にとっては教師になって最初の赴任（四十四年）が高砂小、洋子ちゃんたちのクラス。新米教師にはすべてが新鮮な体験、二年間に生徒との結びつきは深まった。

洋子ちゃんは頭はよいが、あまり「やる気」を見せない無口な子だった。それが、次第に明るくなり、卒業のときは学級委員をしていた。

大沢先生は高砂小に着任早々日記を毎日書かせる指導をした。「私自身にそんな習慣がなかったものですから、小さい頃の思い出はほとんど残ってない。いのちを確かめるためにも……」とはじめたのだそうだ。



それが、短い小さいのちを記録することになった。

むこうには

白く高くそびえたつ美しいお城

そのお城にはいっていく

おいしそうなごちそうが

テーブルの上にたくさんおせて

ある

バナナ、リンゴ、オレンジ

天国ってこんな所

洋子ちゃんがこの詩を作ったのはことしの一月だった。はじめは「作文は大きらい」と母親にもらしていた。だが、半年もたたないうちに、大沢先生に親しみ、その作品は読売新聞埼玉版に二度も掲載されるほどに成長した。「私はおとなになったら看護婦になりたい。美しい白衣を着て病人のためにいっしょうけんめい働く、とてもいい仕事だろう」(ユメ)あとになってみると、なぜか暗示的な作品が多いが、本人は表面的には最期まで全然死を意識しなかったという。食欲もあり、なくなる前夜もテンフラうどんを食べた。



あれから三か月。大沢先生は、五、六年当時の同級生たちから追悼文を集め、「小さな詩人」洋子ちゃんの残した十数編の詩といっしょに、近く追悼詩集を出す。「しかし一人の幼い生命を救えなかった現代医学に対して何か別の形で訴えたかった。ほんとうはもう小学生ではないのだが……」選者の山本氏のところにも、大沢先生からのこういう添え書きがつけられてあった。

(昭和四十六年十二月十九日(日)読売新聞
全国版「婦人と生活」ランに掲載)

思い出詩集



—高野洋子作品集—

天国

階段を一段一段のぼっていく

「天国の門」

まわりが花でかざってある美
しい門がある

その門をあける

赤、青、緑、黄の美しい花

チョウチョ、小鳥、リスのか

わいい動物たち

雲はみんなわたあめ

その雲の上には

白い輪を頭の上につけた天使
たちが

楽しそうに飛んでいる

むこうには

白く高くそびえたつ美しいお城

そのお城に入っていく

おいしそうなごちそうが

テーブルの上にたくさんのお
てある

バナナ、リンゴ、オレンジ

天国ってこんな所

(46・1月作)



こんな作品を残して九月十八日の朝、天国へ逝ってしまった洋子。

わずか十三才と五ヵ月の短い生涯であつたがあなたは精一ばい生きた。

私に、いや洋子を知っている人々に、この上もない悲しみを与え、すばらしい作品を残してこの世を去った「小さい詩人」。

今、あなたの思い出をここにつづらう。

天使の詩を……。

ブー、どうして天国なんかへいっちゃったの

お花がたくさん咲いていて

小鳥や動物たちがとび回っていて……

白い輪を頭の上につけて楽しそうに遊んでいる、羽のついた天使

そこには白い美しいお城があつて……

今ごろブーは、あの雪のようなまっ白な

雲の上で

天使となつて動物たちと遊んでいるのかしら……